

幻の従軍画家三迫星洲

— 戦前絵葉書による図版の整理と分析 —

彭 国 躍

1. はじめに

従軍画家は日清戦争（1894～95年）や日露戦争（1904～05年）の時にすでに存在していた。日中・太平洋戦争（1937～45年）の頃になると、従軍画家の人数が急激に増え、正確なデータは把握されていないが、二百名を超えるという空前の規模に膨らんでいたことは確かである。その中には、洋画家の藤島武二、石井柏亭、小林万吾、日本画家の川端龍子、伊東深水、堂本印象、版画家の吉田博、永瀬義郎、恩地孝四郎など昭和時代を代表する画家たちが名を連ねていた。一方、従軍画家の中には、現存の美術史関連資料の中では記録が見つからない画家も少なくなかった。

筆者所収の中国大陸出征・従軍画家（166名）の絵葉書図版（1102枚）のうち、もっとも作品数の多い画家の上位10名は、古島松之助（89枚）、三迫星洲（55枚）、小室孝雄（39枚）、向井潤吉（35枚）、武藤夜舟（32枚）、吉田初三郎（31枚）、今村嘉吉（26枚）、高橋亮（25枚）、鶴田吾郎（22枚）、栗原信（20枚）である。その中で作品図版が2番目に多く残された三迫星洲は、日本の美術年鑑、物故洋画家事典、戦前各種美術展（文展、帝展、戦争画展など）出品リスト、戦前美術学校の卒業生名簿、そして飯野（2005）の資料集成「戦争に征った画家たち」など筆者が調べたいずれの資料にも記録が見つからない。彼は従軍画家として活躍していたわりには、文献にその名が記載されず、そのプロフィール（生没年、出身地、出身校、師承関係、所属団体、出品歴など）も不明である。その意味において、筆者は彼を「幻の従軍画家」と呼んでいる。

三迫に関する文献情報が皆無に等しいため、本論は、まず彼の絵画が印刷された戦前絵葉書を整理しリストアップすることから始める。次に絵葉書に記された文字情報を中心に、彼の従軍時期や従軍地域について考察し、図版確認を通してその絵画の内容、特徴について論じる。最後に、三迫に関連する情報を総合的に分析し、活動経緯をまとめる。

2. 作品図版の時代背景

戦前の絵葉書に印刷された三迫の作品図版（55枚）のほとんどに明確なサインが入っている。そのため絵葉書に画家名が印刷されない図版も作品の制作者と制作年の特定は比較的容易である。図版のサインに記された制作年に基づき作品の数と活動の時期について表1のように整理する。表1から三迫が中国大陸で活動していた時期は1930年代に限定され、作品がもっとも多いのは32、33年と37年頃であることがまず分かる。1934年の作品は1枚だけで、35年の作品はまったくなかったため、本稿では、空白の1935年頃を境に、それ以前の活動期間を「前期」（31～34年）、それ以降の活動期間を「後期」（36、37年）と呼ぶことにする。55枚のうちサインの制作年が特定できないものは6枚あったが、

表1

	制作年	枚数	小計
前期	1931	4	30
	1932	10	
	1933	9	
	1934	1	
	193?	4	
	19??	1	
	なし	1	
後期	1936	2	25
	1937	23	
	合計		55

その絵葉書の裏面の文字や印刷パターンに基づき同期の作品の可能性が高いと推定し前期に入れることにする。

1931年9月には満州事変が起こり、中国東北地域が日本軍に占領され、32年には満州国の樹立が宣言された。1937年7月には盧溝橋での日華事変をきっかけに日中戦争が勃発した。三迫の絵画作品の年代分布と歴史的背景とを照らし合わせると、中国大陸を背景とする彼の作品はすべてこの2つの事変の間に描かれたという事実が浮かんでくる。戦時中の大規模な従軍画家の派遣は1937年以降、特に1938年4月「国家総動員法」の制定、6月陸軍従軍画家協会の設立以降になるが、三迫が描いた中国大陸の絵葉書図版55枚の中では1938年以降の作品は発見されていない。彼は何らかの理由で37年を最後に、大陸従軍を中断したと見られる。1937年以降の従軍画家は、鶴田吾郎、向井潤吉や栗原信などのように複数回にわたって中国大陸や東南

アジアに従軍していた人が多かったが、三迫の従軍活動と戦闘画制作は、1931～37年の間と見られ、それらの従軍画家とは明らかに経緯が異なる。

3. 作品図版の地域分布

次に三迫が描いた作品の画題情報からその作品の背景となる地域の分布について調べてみる。55枚の図版の中で地域が特定できるものは38枚である。地域の重複を省いたのち、38枚の絵葉書の分布地域を次のように列挙できる。

- ①露満国境・松花江（黒龍江）、②新京（長春）、③綏遠省（内蒙古）、④ゴビ砂漠（内蒙古）、⑤奉天（瀋陽）、⑥遼陽、⑦錦州、⑧熱河、⑨山海関、⑩張家口、⑪北京、⑫天津、⑬山西省

①の「露満国境・松花江」は特定の省や市の名前を指すわけではないが、本論では中国東北三省の中でロシアとの国境線がもっとも長く、松花江の大半が流れる黒龍江省と推定する。

ここで、まず絵葉書に描かれた地域と画家が実際に訪れた地域とははたして同一視できるのかという問題が出てくる。事実上、従軍画家の中で南薫造（1883～1950年）のように当時の従軍日記に記載された移動軌跡通りに絵葉書の図版が発見された場合もある一方、宮本三郎（1905～1974年）、金子博信（1898～1988年）などの一部の作品のように戦前市販された絵葉書や雑誌に掲載された写真を模写したケースも発見されている⁽¹⁾。しかし、模写の作品には実際の現地取材に基づいていないためか、創作年のサインがないのが共通の特徴である。それらに比べ創作年が明確に書かれた三迫の作品は現地での取材に基づく可能性が高いと考えられる。模写の証拠が発見されていない現時点では画題の地域を取材活動の地域として想定する。

以上の画題による地域分布と絵画の制作時期を重ね合わせると、図1で示すように全体として三迫は2つの時期にそれぞれ異なる地域で活動し、前期の1932～34年頃は主に東北地域（旧満州国）、後期の1937年頃は主に北京を中心とする華北地域で活動していた。そして、両地域の境にあたる⑨熱河風景だけは両期間にまたがって描かれていたことも明らかである。

図1が示すように、三迫の活動地域の大半が旧満州地域と重なるので、筆者は、伊藤順三（1890～1939年）や石田吟松（1888～？年）など当時旧満州地域で活躍していた多くの画家や芸術家が記録された『社団法人満蒙文化協会会員名簿』（1926）、『満洲芸術壇の人々』（西創生 1929）、『社団法人満州文化協会会員名簿』（1937）および「〈満州美術〉年表」（飯野 2010）などを調べたが、これらの資料に

図1 画題の地域分布



は三迫星洲の名が記載されていないことが確認された⁽²⁾。三迫星洲という画家は一体どの地域のどのような芸術団体や組織にかかわっていたのかという謎は依然残るが、彼は1930年代中国の東北や華北地域の風景画を多く描いたものの、満蒙文化協会や満洲芸術壇の一員として活動していた人物ではなかったことは確かなようである。

4. 作品の内容と特徴

三迫が描いた作品の内容と絵葉書に印刷された文字情報について2つの時期に分けて確認する。

4.1 前期 (1931~34年)

前期の作品リストを表2のようにまとめる。表2の配列基準は次の通りである。まず絵葉書の印刷パターンによってグループ分けし、同じパターンの中では絵画の制作年順に配し、制作年不明のものは同じパターンの最後に配し、同じ制作年の中では原則図1の地域別順に並べる。

表2 前期の絵葉書図版リスト (30枚)

No	表面		裏面		
	画題	サイン	上段	中段	下段
1	蒙塵萬丈一ゴビ沙漠の隊商	S. MISAKO. 1931	郵便はがき Made in Japan	POST CARD CORRESPONDENCE ADDRESS	
2	酷寒の満州一曠野を行く	S. MISAKO. 1931	郵便はがき Made in Japan	POST CARD CORRESPONDENCE ADDRESS	
3	一望千里の春一満州の一輪車	S. MISAKO. 1932	郵便はがき Made in Japan	POST CARD CORRESPONDENCE ADDRESS	
4	古代文化の夢の跡一錦州城内の古塔	S. MISAKO. 1932	郵便はがき Made in Japan	POST CARD CORRESPONDENCE ADDRESS	
5	雪の満州一農家の正月	S. MISAKO. 1932	郵便はがき Made in Japan	POST CARD CORRESPONDENCE ADDRESS	

6	赤い夕陽—高粱畑	S. MISAKO. 1932	郵便はがき Made in Japan	POST CARD CORRESPONDENCE ADDRESS	
7	山紫水明の境—灤河の風光	S. MISAKO. 1933	郵便はがき Made in Japan	POST CARD CORRESPONDENCE ADDRESS	
8	春日蕩蕩—南満農家所見	S. MISAKO. 1933	郵便はがき Made in Japan	POST CARD CORRESPONDENCE ADDRESS	
9	遊牧の民—熱河密林の紅葉	S. MISAKO. 193?	郵便はがき Made in Japan	POST CARD CORRESPONDENCE ADDRESS	
10	平和克服の新天地—新京城門外所見	S. MISAKO. 193?	郵便はがき Made in Japan	POST CARD CORRESPONDENCE ADDRESS	
11	遼陽郊外の春—白塔附近の放牧	S. MISAKO. 193?	郵便はがき Made in Japan	POST CARD CORRESPONDENCE ADDRESS	
12	大豆の山—新京城外所見	S. MISAKO.	郵便はがき Made in Japan	POST CARD CORRESPONDENCE ADDRESS	
13	清朝榮華の跡—奉天皇寺前門	S. MISAKO. 1932		POST CARD CORRESPONDENCE ADDRESS	Made in Japan
14	亜細亜の曉風—戦闘中の〇〇本部	S. MISAKO. 1932	郵便はがき	POST CARD CORRESPONDENCE ADDRESS	Made in Japan
15	砲弾雨下一前進!! 突撃!!	S. MISAKO. 1932	郵便はがき	POST CARD CORRESPONDENCE ADDRESS	Made in Japan
16	月光を浴びて—騎兵の斥候	S. MISAKO. 1933	郵便はがき	POST CARD CORRESPONDENCE ADDRESS	Made in Japan
17	総攻撃—長城線突破	S. MISAKO. 1933	郵便はがき	POST CARD CORRESPONDENCE ADDRESS	Made in Japan
18	赫々夕陽—長城の決戦	S. MISAKO. 1933	郵便はがき	POST CARD CORRESPONDENCE ADDRESS	Made in Japan
19	曠野の朔風—電信隊の活躍	S. MISAKO. 1933	郵便はがき	POST CARD CORRESPONDENCE ADDRESS	Made in Japan
20	突撃! 突貫!! タンクを楯に	S. MISAKO. 1933	郵便はがき	POST CARD CORRESPONDENCE ADDRESS	Made in Japan
21	爆撃!! 命中!! — 血煙数丈	S. MISAKO. 1933	郵便はがき	POST CARD CORRESPONDENCE ADDRESS	Made in Japan
22	銀盤を行く—結氷せる松花江	S. MISAKO. 1934	郵便はがき 軍事郵便		小林又七本店印行
23	曠野の曙 遊牧の民	S. MISAKO. 193?	郵便はがき 軍事郵便		小林又七本店印行
24	伐木の唄 冬の北満奥地	S. MISAKO. 19??	郵便はがき 軍事郵便		小林又七本店印行
25	酷寒の満州—曠野を行く	S. MISAKO. 1931	郵便はがき 軍事郵便	POST CARD	東京芝丸山納
26	万里の長城—雪の山海関	S. MISAKO. 1933	郵便はがき 軍事郵便	POST CARD	東京神田栗本納

27	黄塵萬丈一夏の隊商, ゴビの沙漠	S. MISAKO. 2591	郵便はがき 軍事郵便	陸軍恤兵部発行	凸版印刷株式会社 印行 (東京)
28	雪の満洲一農家の新春正月の風景	S. MISAKO. 2592	郵便はがき 軍事郵便	陸軍恤兵部発行	凸版印刷株式会社 印行 (東京)
29	赤い夕陽一實のりの秋, 高粱畑	S. MISAKO. 2592	郵便はがき 軍事郵便	陸軍恤兵部発行	凸版印刷株式会社 印行 (東京)
30	露満国境一春雨の後, 満洲里郊外	S. MISAKO. 2592	郵便はがき 軍事郵便	陸軍恤兵部発行	凸版印刷株式会社 印行 (東京)

前期の絵葉書図版 30 枚のうち風景は 22 枚, 戦闘画は 8 枚 (No 14~21) である。そして戦闘画はいずれも 1932, 33 年頃, つまり 1931 年 9 月の満州事変後の 2 年間の作品であることが分かる。

No 1, No 2, No 5, No 6 の 4 枚はそれぞれ No 27, No 25, No 28, No 29 と同じ内容の風景画であることが発見された。No 2 と No 25 はまったく同一の作品だが, 裏面の印刷文字の内容は異なる。No 2 は通常の郵便絵葉書だが, No 25 は軍事郵便である。一方, No 1 と No 27, No 5 と No 28, No 6 と No 29 のそれぞれの絵画内容の間に類似性はきわめて高いが, サインと一部の色や筆跡が違うところも見られる。No 27, No 28, No 29, No 30 のサインには皇紀が使われているが, 皇紀 2591 年と 2592 年はそれぞれ 1931 (昭和 6) 年と 1932 (昭和 7) 年に当たる。そして, 皇紀が使われた 4 枚の絵葉書の裏面には用途「軍事郵便」, 発行元情報「陸軍恤兵部発行」と印刷会社名「凸版印刷株式会社印行 (東京)」が印刷されている。「陸軍恤兵部」と印字された絵葉書は, 1937 年以降に大量に発行されていた。なぜほぼ同じ内容の図版に二種類のサインが存在したのか, 図版の比較分析を通して検証してみたい。

まず, No 1 と No 27 の図版を比較してみる。風景の内容 (駱駝 5 匹の隊商と白い雲) はほぼ同じだが, No 27 は No 1 に比べ画面上部中央の雲が大きくなり, 地平線がやや上がり, 中景の駱駝が少し近くなっている。No 27 の図版は No 1 の原画上部の青空の一部をカットした画面に少し加筆して出来たのではないかと考えられる。画面中央下の緩やかな凹みとサインの位置関係を比較すると, No 27 のサインが No 1 のサインより少し上位に移動し, サインの部分を拡大すると, No 1 (局部) と No 27 (局部) の図が示すように, No 1 のサインの色合いが背景の褐色と調和しているのに比べ, No 27 のサインは背景色と異なる黒褐色で書かれ, そして, No 27 (局部) のサインの下には No 1 (局部) のサイン「S. MISAKO」と「1931」が塗りつぶされたような形跡が観察できる。つまり, No 27 の原画は 1931 年頃一度発行された絵葉書の旧作 No 1 の原画を修正・加筆したものである可能性が高い。

次に, No 5 と No 28 の図版を比べてみる。2 枚は, 建物と人物の位置, 雲の形や雪の痕跡など全体として高度に一致していることが確認できる。しかし, サインが異なり, 雲や積雪の細部の筆跡が微妙に違うところも見られる。No 5 に比べ No 28 画面中央の地平線が低く, 建物がより近く, No 28 の手前の積雪のスペースが狭くなり, No 28 のサインの位置が No 5 のサインより庭の壁に近づいていることが分かる。つまり, 三迫が 1932 年の旧作底部のサインの部分を取り取り, 画面に少し加筆を行い右下に新たに皇紀でサインし直したことが明らかである。

図版の比較分析を通して, 皇紀が記された 4 枚は 1937 年以降何らかの理由で従軍しなかった三迫が旧作に少し手を加え「軍事郵便」として再提出されたと推測することができる。ところが, いったいなぜ三迫が一部の旧作のサインを消し去り皇紀に書き直す必要があったのだろうか。発行元の陸軍恤兵部から皇紀の使用を要求された可能性も考えられるが, 本当の理由ははっきり分からない。戦前では「ゼロ戦」(皇紀 2600 [昭和 15] 年採用) などのように武器の命名によく皇紀が使用されたことや, 1938

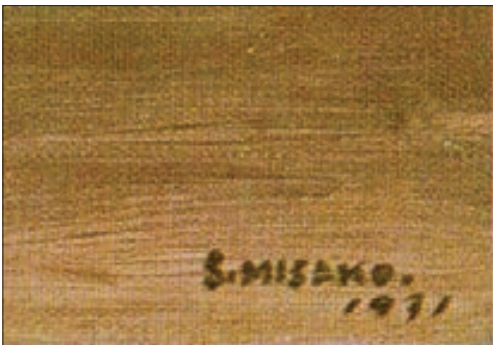
No 1⁽³⁾



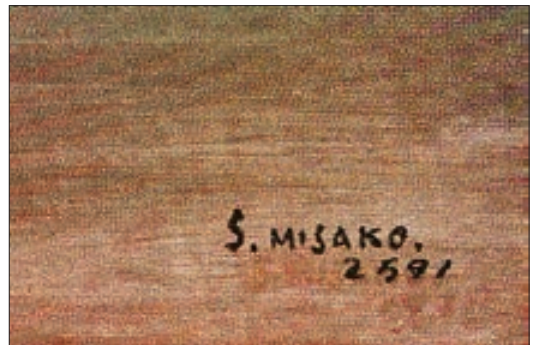
No 27



No 1 (局部)



No 27 (局部)



No 5



No 28



年以降の従軍画家青山龍水、神谷万吉、小室孝雄などの絵葉書図版のサインにも皇紀が使われたことなどが、その時代的、社会的背景を理解する1つのヒントになる。

前期の作品が印刷された絵葉書30枚中21枚の裏面には英語で「POST CARD CORRESPONDENCE ADDRESS」と印刷され、そのうち9枚の下段に「Made in Japan」と明記されている。このことから、これらの絵葉書は当時観光や海外への輸出用で、国内向けや軍事郵便専用ではないことが分かる。彼が前期の1932年頃すでに従軍画家という身分で活動していたかどうかはまだ断定できないが、前期

の絵葉書に8枚の戦闘画が含まれることは従軍の可能性を示唆している。前期作品が使用された絵葉書に朱印の「軍事郵便」が印刷されたものは9枚見つかり、前述のようにそのうちの4枚は、「陸軍恤兵部発行」と明記され1937年以降に大量に発行された軍事郵便用絵葉書と同じパターンになっている。

以下は前期作品図版の一部（風景画4枚、戦闘画4枚）を紹介する。

No 4



No 6



No 9



No 13



No 15



No 17



No 18



No 19



4.2 後期（1936, 37年）

三迫星洲が1936, 37年頃に活動していた時期の作品リストを表3のようにまとめる。戦前の絵葉書に反映された後期の作品図版は、前期の作品に比べ次のような特徴が見られる。

(1) 後期作品の25枚中24枚には、「従軍画家三迫星洲筆（著作権所有不許複製）」と記されている。三迫星洲の従軍経緯はまだはっきりしないが、この表記は、彼が従軍画家という身分で活動していた証拠の1つとみなすことができる。従軍画家の作品はすべてそのように明記されるわけではないが、「従軍画家〇〇〇」と表記される絵葉書には、三迫の作品の外に、古島松之助、小室孝雄、斎藤八十八、秋山春水、水平讓、瀬野覚蔵などのものがある。

(2) 表3の画題の表現内容からも分かるように、後期25枚の作品はすべて風景画である。「従軍画家」と明記されていない前期の作品に戦闘画が含まれているのに比べ、後期つまり大規模な日中戦争が始まる年に「従軍画家」と明示した絵葉書の作品図版には戦闘・戦場の絵は1枚も描かれていない。これは何を意味するのかという疑問が生じる。作品のほとんどは1937年の前半に描かれたもので、7月の開戦以降は中国大陸を離れた可能性が示唆される。1938年の活動は不明だが、後ほど触れるように、1939年頃に彼の台湾風景の絵葉書が発行されていた。

(3) 後期作品の画題には、風景に対する謳歌と賛美の表現が多く使われている。「たそがる、城壁—北京城外の美観」、「夕陽に聳えて—北京正門の偉観」、「蜿蜒長蛇—八達嶺の雄観」、「赫い夕陽—朝陽門外の風光」、「大陸に唄う—北京城角楼の風趣」、「春風駘蕩—北京二家の情趣」など。このような画題は、検閲が厳しくなる日中戦争開戦以降の絵葉書には見られない。1938年以後の絵画には、「白塔より景山を見る」（中沢弘光）、「蘇州の橋」（林唯一）、「九江南門湖畔」（吉田初三郎）などのように地名のみ示すものが多かったが、「輝く東亜の道」（川島理一郎）、「聖恩無辺（蘇州風景）」（松林義英）、「我日の丸ハタメク中華正門」（五味清吉）、「宜昌前線より敵地を望む」（神谷万吉）などのように戦時中戦意高揚のためのプロパガンダや敵対意識が表現される画題も少なくなかった。それらに比べると、三迫のように敵対国の風景をあからさまに賛美するような画題の付け方は1937年以降の作品には見られない珍しいケースになる。それは何を意味するのか、その頃彼が戦闘画を描かなくなったことと関連性があるのか、はっきりした事情は分からないが、当時の従軍画家が置かれた創作環境、表現空間の変化を観察する上で興味深い点であることは間違いない。

表3 後期の絵葉書図版リスト (25枚)

No	表面			裏面	
	画題	サイン	氏名	上段	中段
31	熱河の旅—橋子に乗って	S. MISAKO. 1936		郵便はがき	POST CARD
32	たそがる、城壁—北京城外の 美観	S. MISAKO. 1936	従軍画家三迫星洲筆 (版權所有不許複製)	郵便はがき	POST CARD
33	千里の沃野—綏遠省の蒙古包	S. MISAKO. 1937	従軍画家三迫星洲筆 (版權所有不許複製)	郵便はがき	POST CARD
34	牧歌に明けて—綏遠省平地泉 の風光	S. MISAKO. 1937	従軍画家三迫星洲筆 (版權所有不許複製)	郵便はがき	POST CARD
35	沙漠に暮れて—蒙古隊商の野 宿	S. MISAKO. 1937	従軍画家三迫星洲筆 (版權所有不許複製)	郵便はがき	POST CARD
36	牧草を追って—南口付近にて	S. MISAKO. 1937	従軍画家三迫星洲筆 (版權所有不許複製)	郵便はがき	POST CARD
37	羊毛の山—張家口の市場風景	S. MISAKO. 1937	従軍画家三迫星洲筆 (版權所有不許複製)	郵便はがき	POST CARD
38	長城の涯—張家口羊毛市場	S. MISAKO. 1937	従軍画家三迫星洲筆 (版權所有不許複製)	郵便はがき	POST CARD
39	夕陽に聳えて—北京正門の偉 観	S. MISAKO. 1937	従軍画家三迫星洲筆 (版權所有不許複製)	郵便はがき	POST CARD
40	赫い夕陽—朝陽門外の風光	S. MISAKO. 1937	従軍画家三迫星洲筆 (版權所有不許複製)	郵便はがき	POST CARD
41	大陸に唄う—北京城角楼の風 趣	S. MISAKO. 1937	従軍画家三迫星洲筆 (版權所有不許複製)	郵便はがき	POST CARD
42	家鴨の群—北京郊外二家にて	S. MISAKO. 1937	従軍画家三迫星洲筆 (版權所有不許複製)	郵便はがき	POST CARD
43	春風駘蕩—北京二家の情趣	S. MISAKO. 1937	従軍画家三迫星洲筆 (版權所有不許複製)	郵便はがき	POST CARD
44	蜿蜒長蛇—八達嶺の雄観	S. MISAKO. 1937	従軍画家三迫星洲筆 (版權所有不許複製)	郵便はがき	POST CARD
45	石獸の道—北京明の十三陵道	S. MISAKO. 1937	従軍画家三迫星洲筆 (版權所有不許複製)	郵便はがき	POST CARD
46	黄瓦翠池に映えて—北京萬壽 山	S. MISAKO. 1937	従軍画家三迫星洲筆 (版權所有不許複製)	郵便はがき	POST CARD
47	楽土の唄—盧溝橋の風景	S. MISAKO. 1937	従軍画家三迫星洲筆 (版權所有不許複製)	郵便はがき	POST CARD
48	城外の春—駱駝の群	S. MISAKO. 1937	従軍画家三迫星洲筆 (版權所有不許複製)	郵便はがき	POST CARD
49	泰平の逸民—天津小盗市場	S. MISAKO. 1937	従軍画家三迫星洲筆 (版權所有不許複製)	郵便はがき	POST CARD

50	暮る、城壁—天津南門外	S. MISAKO. 1937	従軍画家三迫星洲筆 (版權所有不許複製)	郵便はがき	POST CARD
51	大厦高楼—天津日本租界旭街	S. MISAKO. 1937	従軍画家三迫星洲筆 (版權所有不許複製)	郵便はがき	POST CARD
52	順風を帆に受けて—天津白河の暮色	S. MISAKO. 1937	従軍画家三迫星洲筆 (版權所有不許複製)	郵便はがき	POST CARD
53	積荷を終わって—天津白河河口にて	S. MISAKO. 1937	従軍画家三迫星洲筆 (版權所有不許複製)	郵便はがき	POST CARD
54	岩を穿ちて—山西省の穴居生活	S. MISAKO. 1937	従軍画家三迫星洲筆 (版權所有不許複製)	郵便はがき	POST CARD
55	名利に集ふ善男善女—山西省の石佛寺	S. MISAKO. 1937	従軍画家三迫星洲筆 (版權所有不許複製)	郵便はがき	POST CARD

三迫が後期に描いた風景画の地域分布は、北京（12枚）、天津（5枚）、内蒙古（4枚）、張家口（2枚）、山西（2枚）となっている。以下25枚の中から8枚（北京4枚、天津2枚、山西2枚、内蒙古、熱河1枚ずつ）を紹介する。80年ぐらい前に描かれた作品の絵葉書図版とは言え、哀愁漂う古き時代の大陸風景はいまでも見る人の心を引き付けるものがある。

No 31



No 33



No 39



No 40



No 41



No 42



No 50



No 52



No 54



No 55



5. その他の図版の確認

三迫が描いた絵画の中で、以上で取り上げた中国大陸関連の図版の外に、以下の3種類のものが確認されている。

(1) 「S. MISAKO 1917」サイン入りの油彩と見られる風景画の原画図版(1枚)、朝鮮民族衣装をまとった少女たちが山の斜面で花を摘む風景(図2, 図3参照)。この1枚は朝鮮半島か中国東北朝鮮族地域の風景と推定され、三迫が1910年代に描いた唯一の作品情報となる⁽⁴⁾。この作品の存在により三迫の洋画創作の期間が少なくとも30年間に渡ることが分かる。それにより彼の年齢に関するおおよそ

の類推も可能となる。図2は10歳代の作とは考えにくいので、かりに図2を描いた時の彼が若く20歳代後半か30歳代前半だと仮定すれば、1937年頃彼は50歳前後になり、終戦（1945年）頃には、もっと高齢だった可能性もあるが、60歳前後になっていたであろう。

図2



図3



(2) 「S. MISAKO 1934」サイン入りの絵葉書図版（7枚）、東南アジアの風景。太平洋戦争が始まる7年前なので、従軍画家というより、一風景画家として1934年の春以降彼が中国東北地域での活動を終え、東南アジアを訪れた時に描いたのではないかと推測される。これらの図版は以上で議論した中国大陸における前期と後期の間の活動内容の一部を示すものとなる。図4と図5はその内の2枚「カノーに乗って—南洋」と「海亀の捕獲—南洋」である。

図4



図5



(3) 「S. MISAKO 1939」サイン入りの絵葉書図版（10枚）、台湾風景。これらは日中戦争勃発後、つまり彼が中国大陸での後期の従軍活動を中止した後の活動を示す証拠の1つとなる。図6と図7はその内の2枚「南庄の獅子頭山」と「竹筏の舟の四手網（日月潭）」である。

図 6



図 7



以上の3種類の図版から従軍との関連性を確認することはできなかった。しかし、これらの情報は三迫星洲の中国大陸以外の地域での創作活動と移動経路を知る上で重要な参考となる。

6. まとめ

筆者が現在把握している三迫星洲の作品図版とその図版内容に基づく関連地域について以下のように時系列でまとめる。

- 1910年代：17年，（当時日本統治下の）朝鮮半島か中国東北の朝鮮人生活地域と見られる風景画（原画図版）
- 1920年代：活動不明。
- 1930年代：31～34年初頭，中国東北地域の風景画と戦闘画の絵葉書
34年春以降，東南アジアの風景画絵葉書
35年，活動不明
36，37年，中国華北地域の風景画絵葉書，「従軍画家」明記
38年，活動不明
39年，（当時日本統治下の）台湾の風景画絵葉書
- 1940年代：活動不明

最後に、戦前の画家たちが残した手記や日記などを読むと、当時の画家たちの従軍は、画材や旅費の提供が受けられる写生旅行であったり、戦時体制下における徴用命令への応召であったり、戦場を駆け巡る命がけの取材であったりするなど、行く人の身分、従軍の時期や地域によって受け止め方がさまざまであったことが分かる。いまわれわれは戦前の「従軍画家」の実態を正確に捉えるためには、まず一人ひとりの画家の作品図版を収集しその従軍の時期を特定し経路を辿ることから始める必要がある。本論ではこれまで知られていなかった三迫星洲の創作活動、特に1930年代頃の作品図版に反映された活動地域などについて考察した。本研究により、彼は、満州事変後1932～37年の間の一時期に従軍はしたものの、朝鮮半島、中国東北部（旧満洲地域）、インドネシア、中国北部、台湾などアジアを舞台に活躍していた多産な風景画家であったことが明らかになった。彼の出身地、交友関係、晩年の活動地域など依然多くの謎が残ったままであるが、今後本稿を機に情報収集が進展し、従軍画家三迫星洲の真実が明らかになることを期待したい。

注

(1) 南薫造一行の従軍作品については彭 (2013a, 2015) を参照されたい。宮本三郎や金子博信については、それぞれ次のように一例を挙げる。

宮本三郎作



写真 1



金子博信作



写真 2



宮本三郎作「支那風俗—田舎の馬車」と金子博信作「蒙古風俗—蒙古井戸」はいずれも内田洋行の発行による軍事郵便絵葉書である。筆者によって発見された模写対象の写真のうち、写真 1 の絵葉書の発行年や発行元は不明だが、写真 2 は『新満州国写真大観』（野間清治編大日本雄弁会講談社 1932 年 159 頁）に掲載されたものである。

- (2) 『社団法人満蒙文化協会会員名簿』（1926 [昭和元] 年）、『満洲芸術壇の人々』（西創生 1929 [昭和 4] 年）、『社団法人満州文化協会会員名簿』（1937 年）はいずれも加賀登等（1999）に収録される。
- (3) 本論中の図はすべて絵葉書の余白をカットし、図版と文字の部分のみ提示する。
- (4) 2010 年頃ネットオークションにかけられていたが、原画のサイズや現在の所在などは不明である。

参考文献

飯野正仁 2005 「戦争に征った画家たち」『あいだ』（116～119号）「あいだ」の会
飯野正仁 2010 「〈満洲美術〉年表」『「帝国」と美術』（五十殿利治編）国書刊行会
芳賀登等 1999 『日本人物情報大系』（第 19 卷）皓星社
針生一郎他 2007 『戦争と美術 1937-1945』国書刊行会
藤崎綾 2005 「南薫造『従軍日記』」『広島県立美術館研究紀要』17-49
彭国躍 2013a 「南薫造『従軍日記』の図版検証——戦前絵葉書の美術史拾遺」『神奈川大学評論』（74）神奈川大学
彭国躍 2013b 「従軍画家瀬野覚蔵とその戦地記録画——戦前絵葉書による美術史拾遺」『人文学研究所報』（50）神奈川大学人文学研究所
彭国躍 2014a 「従軍画家たちが描いた戦時中の上海——軍事郵便絵葉書による図版検証」シンポジウム（2014 年 2 月 15 日）『東アジアの租界・居留地とメディア』神奈川大学非文字資料研究センター主催
彭国躍 2014b 「版画家永瀬義郎の従軍軌跡」『人文研究』（185）神奈川大学人文学会
彭国躍 2015 「南薫造『従軍日記』の図版検証（補遺）」『神奈川大学評論』（80）神奈川大学